



^ 13
2898
7



門へ 13
2898
巻 7

文久三年戊戌七月長江に看

撫母之内

四余
尾定

長喜

近世新話 雲晴間雙玉傳第二輯卷之二

第十三回

播陽三木 宮田南北編次

西の宮浦不行龍好母子不逢ふ

楫五郎はまごころと紫雲二部ともあひつ。檜垣屋に立うへれば管侶
擢六と首と。母鼓子花角力士纜等まゝ。皆門邊に出現し無夏の
帰国とよろこび税。新衙公のうりありと。斯と主に報され
ハ船十郎は是と聞て自次の間まゝ立出づ。やよ舩汝ハ昨ハ續を
嚮へうへ。何緯ありて。只獨福原の散客。斯物公心か世の中
何と獨り跡の残る。無心かすや不敵ありと。噴き

又性傳二編

昭和九年四月

揖五郎の頭とさけ。某猛可ふ足痛起り。歩行心不任せらるる人。
 御叱りと顧み福原一宿せり。それあつて這御侍の西播の
 人あつて。池垣貢と喚做御方。些憑とて更あつて。伴ふて入り
 し。やよ。纜昨日汝不別る。時。彼茶店不懸るひし御人
 あり。首言奥亭へ請進せよ。早く。と急ぐすふぞ。解分
 心得まふし。奥亭へ伴ひ行ぬ。叔揖五郎のさうさうさうき。福
 と牽出し。心快々と患ふあづ。一間入る長逆旅の足
 休ど休まらぬ。心ひとらふ打あんと。其日の酒飯も喉咽
 ふくさうらす。鬱々としてまうたれば。母鼓子花の先妻ある。七
 草引く。其心ぞま信貞あね。揖五郎が面色の常平

あらざりしと見てがれば。婢女と以て揖五郎と。小蔭へ招き。やよ
 揖五郎。开方。顔色何日ふかそうて。心遣ひの絆ある体り
 や女郎の更ふつ。心不任せぬ更あつて。隠さる吾済不悠斯
 と。絆打あけ。云て見や。カふ及ぶ事あつて。老爺不隠して
 少々の更への働して見るべきもの。何故か。只獨心遣ひとあ
 ぬるや。間が揖五郎涙と流し。尋常の更ありせば。あつて面あつ
 て。母上悟らまやべき。吾済が心遣ひとつて。並々の事
 あつて。最大変と牽出せり。其故の箇様々々。同客の女賊あ
 りて。我々びま。其眠せ。間ふ蜜ふ雌龍の太刀と棄る
 遠く逃去し。譚と聽て鼓子花の驚き保れ。昨日解分云



又正傳二編卷之二



双玉傳二編卷之二

集め楯五郎が難義と故とんと思ひふらまごありく小。三千
 金の大黄金の容易不得べき事ありね。夫船十郎に見ていふ
 や。まごごう弱き楯五郎が身不拿てい莫非ありね。まごご
 りど最い。不船状と為出しま。例の妓艶女溺ふ。黄金
 殿と遣ひ過ぎ。當惑不及び。今日しも吾濟ふ如く。と
 緯打開て嘆く。みあんなさぬ中のうあ。さう。噴き。継母
 根生あり。恨ま。い必定ゆ。働く見人と諾。思謀と
 しても最大金。あ。女の力及む。何卒大人の御心
 う。吾濟ふ借と思さ。二千金と借賜。最喜志
 侍あり。い船十郎眉ふ皺よせ。ま。楯五郎が例の

蕩今ま。騾の黄金と果。家の破滅と思えぬ。較盜。勘當とよ
 ろと思ひ。一回や二回の更あり。這回ハ別て大金と果せ
 一緯の安。是非勘當をつと。緯皆吾子任。ね
 と。い。数子花涙と流。那子と勘當為。吾濟が怒
 へ云侍ら。只今もやせ。あさぬ中。うあ。さ。ふ。ら。
 爺父へ諛云傳。継子勘當。と。云。い。必定あり。
 此上の吾濟より。諫進と加。後。と。固。い。あ。さ。ら。ふ。べ。
 今一回思ひ直。行往心の直らぬ時。思ひ。い。と。陰。ふ。か
 り。陽。ふ。あり。子。と。思ひ。出。の。真。心。と。察。して。夫。船。十。郎。も。さ。う。く
 と。怒。を。着。最。憎。き。奴。あ。ま。ど。开。方。の。厚。き。心。み。愛。て。思。ひ。ぐ。ま。所

と忍び黄金へ开方ニ借与へん。這緯のりく 解奴小。吾出せしと
云々勿れ。子の三界の首枷哉と云つ起て鎰と携へ土倉ひらき二
千金の黄金と拿出し。情々地小鼓子花小逸与り。鼓子花深
くよりこびつ。二千金の黄金と携へ奥の亭小行て見らふ。紫雲三
郎へ前宵より。の芳やありく。襖づきく眠てゆり。鼓子
花小召覚し。首言賓主の礼を演りやあふ池垣貢主。前宵ハ
不測の夏より。いづ子の揖立郎が身の災難。御身の同宿し給
すべ。いづ成行夏もま。測叵あき大夏小あふひ。さ一詰つて銀
の去向聴聞ハ开原子さまの。雄龍の刀と所持しあふとや。佯倅
それと賣らごさうとん。愿うくもあきとらこびん。そが價ハ三千

金とく閑侍ま。老爺へ這事云測され。黄金の調達心任せ
む。わりく這首小二千金調てい。跡千金ハと四五日猶豫む
給ら。吾済がよりこび是ふ如む。要時待て賜らとやとりのハ
行龍打やあ。こハ早速の調達うか。吾済ハ元原武藝修行ハ
船の上あねん。去向ハとらこ急ぐね逆旅。非除五日が十日と共
這里小留り侍侍らん。そが丹小失ひ多し。雌龍の劔の災驗
も。付人とり夏も有ま。刀ハ勿論二千金も。體小御身小預
け侍らん。心徐小跡黄金の準備とねと温順ハの。一風情
ハ最尊く君子と云べ。秀才ととと。形姿と意と表は
て。外面如菩薩丹心如夜又。是等の亞流かや云つ。鼓子花ます

ます頭とせしれ。こゝ有難き仰うか。這里に滞留しよふ内、二棟
 上あり這家の裡、仰ふ従ひ二千金、吾濟が預りやべし。仰用の旨
 は此如々々と、密に仰有あしむ心任まひし、すべし。の行竜
 うちうらうらび。徐々と衣帛袍を開き、那名刀と拿出し、鼓
 子花に遞与うらふ。鼓子花、火陰うらふ。抜放して是を見
 る。雄竜の形、鉦に頭を真に希代の名刀あり。推戴て鞘に
 収り、不論行竜、向くつやう我、渾夫、身と何如ある人と問へ
 刀の視貫者ありと、非害ふ云く、あつるべし。首言名刀とま
 し受。うら子心の心と休むべし。次の間へ退出うら。不題
 船十部、行竜が風體九人あり、ざると見く。其所以と問へ

行竜答て其ハ。武藝修行の船あれども、火一カ、の視貫とあす故。
 路短より、知遇して、揖五カ、你に誘はつて、這里に來つ。霎時や
 うと求り、浪華津の原來して。此の由縁もあるを、翌
 明より、那地行ま、欲も、那地の名々々、繁花あり。此處
 や、那處と見巡らば、七八日、歸り來らば。雜度心と置あはむ。
 吾う、來るまで、荷袍たのま、まある。登夜、悄
 悄地、鼓子花に告て、百金をうら、黄金と受拿。其翌朝、檜垣屋
 と立出。浪華津へ、出くうら。柳浪華の大津と、謂西成
 東成の、兩郡に跨り。地豊ふして、商賈富是と、繁地といふ。是
 欽、是と俗地といふべき、欽西、海水の遠望あり。東の、岬あり

山少ふして川多く。市中ふ船舶術術して。仁徳聖治の迹と
りふべし。行龍此地ふ止る度五日むらう。原来浮薄の性かれ
へ晋衙の名妓と関へし。積しりふ松位ふ馴て。那百金の黄
金さ人忽地ふ遣ひ果し。自兵庫ふ入り来り。悄悄地ふ鼓子
花ふやや。吾浪華ふ此の備ありて。十日むらう滞留もくし。
右の黄金と五百金むらう。借多くと云くは。鼓子花乃那
金と。二千金持出つ。御身浪花ふ御備のありて。黄金の用入
度いあふ。五百金とのたまふより。是どけ持く行くと。
りふ。行龍心得て。豫金子と受收め。亦浪花津へ急ぎし。西
の宮の這方みく。忽地向うへ年の頃ハ十五六の弱き侍と

亦一人ハ年の頃三十有七八ある。艶顔美廉の女性嬪と見へ
髪の結さま身の姿形一際目立逆旅の空奴隷一名召連く。
訓ぬ逆旅も足元も。便少あく見へし。道ふ女の瘡の疾と
見へし。痛とすれべ。那侍心と付て仕旁有さま。母子と見へ
て哀之。行龍近くありま。み声とくけし。やよ女中。見れが
御身の瘡氣ふ痛。御難義の体み見へし。我僥倖ふ良薬有
弱人是と献らまよ。とりふ那侍ハ。こゝ有ぐき。仰る。御
言も云く。逆旅ハ踏訪世ハ真情とく。這ふ上こま
真ハあし。慈情の妙薬やよ母上。召多くと行竜が渡せし
印筆推戴き。やあし。刀の掃枝拔持那薬と鋒ふけく口ふ

あり。吾播磨ふあり。一 峯名古刀餘の大名ハ最尊く聽做し。吾心是より浪華津へ此の備うく往行あまは。傍侍し。好同朋路あを行方の譚ハ踏す。うやべし。既ふ打連扮て行。三町むらり。忽地傍の林の蔭より。蒲上大學が家來あり。割田五太平。引引つと踊り出。大地披し。踏と遮り。大音小罵り云や。やおれ名古小太郎。奴汝が母の袖篠ハ。某し。主人あり。大學公。豫てより。心とくけられ。いふ。て。手ふ入んと謀り給。い十郎。奴小腹切て。謀計首尾よく行り。一 勇ふ。汝這回。固守。仰と受。衛妻共。侶国と去し。と。大學公。最本意あ。思し。召れ。悄々地。小吾等。小命せられ。衛妻奴と將。帰れ。仰と受。判

田五太平。討手の役。僚不向。う。衛妻。逸子。て。牽く。強。世界へ逃去。ある。鬼や角云。ハ五太平。が。白刃の。引導。逸子。一 吳人。し。呻。呻。て。は。立。う。小太郎。大。怒。り。と。あ。一 噫。惶。ろ。一 大學。奴。が。悪。計。り。あ。し。今。逆。も。知。さ。り。一 敵。ハ。今。そ。蒲上氏。そ。が。元。腕。ある。割田五太平。冠。敵。の。血。祭。り。此。世。の。休。假。拿。一 て。吳人。と。刀。と。拔。く。勢。込。ん。ぐ。討。て。蒐。る。五。太。平。夥。兵。小。下。知。と。あ。一 蒐。ま。く。し。罵。れ。バ。夥。兵。の。共。衆。十。余。名。拔。つ。ま。切。結。と。小。太。郎。忠。孝。緯。共。せ。ず。必。死。ふ。あ。つ。挑。あ。ふ。尖。き。鋒。電。光。石。火。這。里。不。願。と。れ。那。里。不。陰。れ。飛。蝶。の。一 働。バ。ま。う。く。く。ち。り。不。夥。兵。共。五。六。名。手。と。負。く。り。這。隙。ふ。五。太。平。ハ。袖。篠。と。奪。拿。ん。と。飛。蒐。て。組。付。と。袖。篠。



平太のむねをきりつゝ
 小太のむねをきりつゝ
 小太のむねをきりつゝ

西の邊の
 風を斬る

小太夫

小太夫



又五傳二編



そで

又五傳二編

〇十

も一生懸命短刀拔持五太平ふ討て鬼れば這方もするさ手。船と
 かまうてあーらーら。袖篠が早業ふ。さまりり。さうさう。刀と拔持。
 丁々ハハハ。切結べ。残りの野兵是と見て。主討せ。と袖篠と。
 八方より拿圍既ふ危うく見へる。所ふ首より小陰ふ立く。窺
 居る。較倉行龍編笠深くうづりあぐ。刀拔持頭も出。野
 兵共ふ討て鬼ふ。五太平是と見るより。面倒あり。刀と引提行
 龍ふ遞与合。上段下段と切結ふ。行竜が打込鋒。突然とて電光
 のごとく。受損。五太平を體ハニッふ割田が灰さまのけさうら
 つ。倒る所を。行竜やうう十々滅の一刀。是と見く。野兵共惶れ
 戦き。四度路ふ成く。西の方へぞ逃去りたり。小太郎大に憤う。

きとあーら。追くるを。袖篠要時と押止め。やよ小太郎よ
 待給う。那等既ふ逃失くれ。是と追くと其甲斐あり。怪我
 ありさうらふ帰をく。母が止る一言ふ小太郎是非あり引下。
 不題行龍ふ禮との。今回の危急ハ御身の扶捕ふふあり。殆
 難義ふ及ぶべし。最有測き絆あり。什麼御身の貴姓大名
 い。名のうせふ。問へ行龍や笑く。さ。懇勤あり仰るな
 是し。その絆ふあんど禮ふ及ぶべき。予姓ハ池垣名ハ之真と呼做
 称と真と名のり。侍伴うと逆徒逃去。万慶是ふあり。夏か
 と。よろらぶ。丹ふ悲し。袖篠が夏あり。嚮ふ野兵と戦ふ
 内。左の肩と健ふ打さうら。首のやう。氣の張り。さまう。痛

と覚へざりし。小這首小至つて心緩り。其登痛更甚と。生弱婦の緯ありくも。始今ハ苦痛小迫り。跣行緯も測られ。奴隷力ニと西の宮の駅まゝ走らせ。轎一張借來りつ。袖篠と這ふ打乗。不題道と速早つて其日の暮過る頃。浪花の歌客小着きまゝ。登音行竜云々。吾済ハ元原南辺小定歇宿あり。這里よりハ遠くハ。那里へ行て歇客べし。隨分母押小氣と付く。と云バ小太郎小腰と亀め。こハ有測き貴君の袴雜備母刀白外腕の痛も。原來假首の緯あれば。心ふくくるまゝ。この更あらず。尚此上も貢主より。願ひありと。門辺まで見送り出つ。礼と盡して。ゆくれり。行竜ハ心の熱首尾やう。邪魔ハ拂う。是よりハ

まがたの。ありと。再び晋街の柳巷小行那一千金の黄金と。以て。藤太夫と。酒酒小耽り。重耳が衛国小娯。ぐ。心の望と打す。れ。虚業々々。て日と送りぬ。

第四回 青樓小上て行龍七草小逢ふ

不題も名古十郎が妻袖篠ハ肩の痛頻や。て。今ハ堪へ有ざれども。緯白地小云々。又小太郎が最厭ふ患の上小患と。ま。勞素人緯のほろろ。れ。忍ぶと。されど。忍むれぬ。浮船の上と。り。ハ。あ。ふ。い。で。苦。し。も。胸。の。内。と。悟。ら。れ。ま。と。決。と。つ。と。緯。小。躬。ら。ら。慈。小。陰。せ。と。肩。上。次。第。小。腫。て。今。ハ。抗。と。倒。一。マ。最。苦。し。く。小。見。へ。れ。バ。小。太。郎。大。小。患。悶。歇。客。の。主。小。如。此。々。の。

ぐぞすみ背くくぐく。やたり。這地ふ葬るべし。云ハ主ハ心得て
 かり宗寺へ人と遣し。其由と云せられ。其翌日。寺よ
 り僧來り。原來袖蓀が灰骸と檢改。終ふ火葬ふあつたり。這日
 の雜費悉く。小太郎より。さまへつ。跡態寧み吊ひたり。登皆
 小太郎肚の裏ふはくく。と思ふや。浦上大學連。盈奴ハ吾兩親
 の冠。あつて不具戴天の敵。渠が惡謀ハ豫め。割田が言て知り
 足まら。いざや。是より。因み入り。緋如此々。と我君へ。上て
 浦上奴と。殺して親の亡霊と慰へきや。それもま。浦上も
 當時。推巨。慥か證と用ず。卒尔。み焦る。緋とあ。我
 君明。み。せ。と。日月浮雲。み覆る。道理。至。

しくあり。父が遺言の大隻と廢せ。却て不忠不孝とあり。心行
 小名玉の有為と尋其上。父母の冠と報む。是。至忠至孝
 あり。噫。恸。心。這首。み定め。それより。小太郎忠
 孝へ。奴隷カニと召連て。現在玉と持。る者。同。浪花。あり
 と。知らず。泣々母の墓前。み拜。して。東の方へ。出行。たり。夫。原
 來。且。休。題。紫。它。二。郎。行。竜。へ。晋。街。み。て。最。高。風。王。樹。屋。と。い。ふ。家。み
 ありて。洞房の。み。日。と。暮。る。或。皆。亭。主。や。る。へ。大。人
 へ。ま。ご。知。ら。せ。る。を。す。や。這。頃。柙。巷。へ。田。舎。より。一。名。の。媒。慰。來
 たり。少。し。齡。更。み。得。じ。も。花。標。ハ。亞。流。希。あ。る。者。あり。那。亦
 飽。まで。酒。量。あり。尤。より。媒。慰。あり。と。い。ハ。行。龍。わ。

笑ふ。その好者の来り。遂招き来よ。幸頭もはきて来て。いふ亭主の心得。早く使の人と遣り。那媒慰おど招き。宴時して那媒慰。早七八分の酒。酔つ舞つ入来る。行龍首。這と見え。豈さうらんや。這女。岳曾古太平二。後妻ある。七草。ありければ。ちつと駭き顔と背。七草も紫。二郎と見る。是もおどろき。近き寄く。開方。云んと。まると。紫。二郎。眼と以て。知らず心の内。と。早くも察して。七草。さう。ぬ休。座。つて。し。が。宴席裏。入つ。浮んとすれ。どの底。沈む思ひの。あ。海。と。や。焼く火の。胸の内。互ふ安き心。あ。不題。登日の酒宴。は。そ。く。あ。して。果。れば。七草。這家の主。招て。密。や。那。

客の西国方。ま。弱き人。あ。れ。と。吾。濟。少。由。縁。あり。甲。青。へ。情。々。地。古。郷。の。絆。尋。情。由。あ。れ。ば。這。絆。御。身。が。吞。養。ろ。些。少。と。遇。して。ま。や。と。し。主。の。点。頭。て。那。雄。客。へ。首。より。蹟。王。の。恋。濃。人。あ。れ。の。更。夜。ふ。何。や。那。や。と。絆。不。妨。あり。や。せん。這。義。と。い。得。ら。る。七。草。心。得。く。原。來。行。龍。が。坐。亮。小。行。絶。て。久。く。絆。あり。や。と。三。木。の。騷。動。より。和。主。ら。い。り。ま。や。と。問。へ。行。龍。陰。言。う。と。悠。々。あり。と。登。日。の。騷。動。且。危。き。と。脱。し。更。遺。り。あ。り。譚。り。う。れ。ば。七。草。大。差。嘆。し。原。來。又。吾。濟。か。く。あ。り。種。々。の。談。し。あ。り。心。徐。不。聴。ね。う。我。渾。夫。あ。り。岳。曾。古。太。平。二。登。日。へ。三。木。不。出。仕。して。国。守。の。御。備。と。勤。め。し。思。

かけおろし其夜の騒動勅使とて入じし女の盗ありとて城中よりハ野兵大勢追々不慮つりし不女ハ早く逃去て加旃紫三郎入。侶不去尚の知もさうりしと即時不御身と那女の像をま画ふくせし。尋て之をたきびし。登岩一名偽勅使の供奉しし來て手下の光視開條して云やう。那女賊とて當領分あり。滝野村の郷士。岳曾古太平二が娘巽女といふもの。那名王と棄んて勅使とかりて。込入りしと。聞て国守長則朝臣。その大切の罪人。岳曾古太平二召來り。那と吟味するあつた賊婦の來歴知るべし。仰の言不野兵の大勢ハ滝野へ來りたり。這首岳曾古太平二ハ慈子緯とい夢うも知らず。安然とて居る。所へ捕手の大將

買山高保殿兵の大勢引連せし。仰説ごふとよひうけく。玄関口よと込入り。太平二大ハ驚き忠れ。こころ心得ぬ仰説呼たり。吾もあひて且以く。累買る覚へありしと。云せも果て買山高保や此と太平二何とうあつた。你情と地ふ娘ふ云つけ。偽勅使とあり。御館ふ入込せ。名王と棄取り。這胡ふ及んが何おろしと。早と娘と出さるべし。あつた踏込ん。你共侶捨奪ん返言いつふと。詰寄り。太平二大ハ迷惑し。こころ存りよりぬ仰うあつた。娘巽といふもの。在くれし。嚮し親の心不逆ひ。既ハ家出をりし。たりし。いそぎもあつた。信とねつけ。大胆之老耄奴尋常あつた。開脩せま。首言是奴と引索捕。奥へ踏込女と。家さかす。百捕

と言ふ従ひ夥兵の大勢早太平二と地小引居。高手小手小警々う
登山首買山夥兵小下知して奥深く乱れ入座舗の隈々穿牽れど
しかや一きものごとて。甚那ふあさるあぞ。買山大小憤り。この太平
二奴巧工あ。娘と早く走らせし。疑ひあし。思ひふられ。家養の者
ものこり守警。村全代一名と。近隣二三ヶ村の長と引つれ。三木の城へ
入り入り。不題這由と国守小訥へ公聽の決政と待々。吟味懸
この衆僚太平二等と召出し。嚴し。問糺とあすといくども。原元
おちぬ。緋あま。あし。罪み落む。因之太平二。蒲上へ番
罰とかりある。登山首蒲上大學へ。肚裏思ふやう。太平二平日禁
格あ。黄金數多貨貯り。吾今国守小讒訥して。那と失いころが

余金と悉く拿収。然して滝野と某しが。采邑小拜領し。天神山ふ
是と居城とま。皆へ威勢あ。国守小劣。天神山の勢儉ふ。是
と城となす。あし。要害尤堅固あ。覇と定る。至る。這山原
元儉ある。緋へ齋小大蛇と退治の時。吾よく地形と見定め置り。
噫。佳あし。思案し。登夜悄々地小太平二と。縊り殺し。呼鳴
天命ある。うな。岳曾古。焚貪う。て人と恵ます。非道而民と損ひ
ゆ。爰ふ至つ。蒲上が為小身滅び。臭と后代小流小。小人の文
の野小。旗う。初編小迷り。夏首て。爰小顯然。小人の文
勝か。の。間話休題。余程小大學。其翌朝狼狽し。休み。狂
可小登城。長則朝臣小云々。やう。前宵罪人。岳曾古太平二。暴

又五傳二編終

岳曾古太平二が滅亡の一件。浦上大學が天神山山城を築
く。其の本文小因てのづからしるべきに。緯ふ前後の見しごとへ
人もあらんと。七草が説譚ふせしむるまじき。作者の深
意ふよなり。這書中元來悠る夏多し見る人察しよ
とらふ

登音しも紫宅二郎の七草小問たるやう。豊地村の御身が兄
の富作といふ人ありと聞り。何所以其里へは行きたりやと。問バ
七草頭と振りやとよ。吾濟が兄ある。浮雲屋富作主の大将嫡孫
人ふして。吾那方へ立入り。二日欽三日欽暮と丹。富作大に喃
你嚮み兵庫の檜垣屋へ遣せしむ。船とち悪くて入されらるが

幾やともあり。滝野村ある。岳曾古僻後妻小遣り。然ふ今回も
那家の破滅ふよつと入りきり。亦再兄が役介とありと厭ふ
ありねども。开方のやうお妹が有て。此富作が顔潰し。吾濟
が顔と見ると時。那閻魔大王が和中散と掌とやうに笑ひのり。字
も出ぬ所以。吾濟も心中忌々鋪。さうこそ。這里へ出来あり。御
身の這里ふあり。べき知音のありて悠ひさし。這地ふ止り
ありやと。問バ行龍答てしやう。吾濟毫の所以ありて。御身首
嫁入ありし。檜垣屋小足と止て。鬱散のこゝ。這里所へ先頃より出
てあり。御身が和子の楯五郎主通成長つとされ。一個の好男子と
ありし。今の丹室鼓子花主へ心む人最信負あり。實れ子

より憐れ。焦る継母ふ仕へる。世ふ僥倖といふものあり
と。之が七草喜て。その何よりの嬉しきあり。和主此後兵庫
ふ帰り。吾子揖五郎ふ遇多しあふ。吾舟が絆と如此々々と告て
悄悄地ふ這處へ尋ね来るやう傳てて。這絆憑ひへと。尚巨細々
かたらふ。其夜ハ退出て入りたり。不題その後も七草あり
ありふ通ひ來る私通せんといわれども。頼太夫と立まば。電
と泥亀の差別あり。行竜が心ふ協む。いっしつ疎くあり。七
草も。七草ハます。凝る。紫雲二郎と頼が中の好と羨る。心
妬ぞ思ひたり。一日兵庫の檜垣屋ある。家酉擢六來り。行竜
見ていふやう。嚮み名刀賣らざれば。最あり。ぬき。跡金一千

九百金調て参りたり。御受納あるべし。紙ふ包んで出たり。
登為休聲あり。辞色首ふむらう。なれば。行竜心中疑ひあり
と。首言黄金と改つ。受拿書て。いさ。登首擢六やう。
御身が荷物調度の御品。這方ふ預り置ひ。心任ふ兵庫まで。拿
ふ。余ら。是れへて。座と立。入りたり。行龍心中怪しと思
い。殘金遺物。得らう。なれば。深くも替む。濟ふらう。

近世 雲晴間雙玉傳第二輯卷之二 終

五高 御書

又五傳

